

## 語られた女性教皇

### 女教皇ヨハンナ

2017年のNHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」は、井伊家の一人娘で尼僧の次郎法師が直虎と名乗り女領主として戦国時代を駆け抜ける、「女性活躍」物語である。この直虎が女性ではなく別人の男性であることを示す史料が先ごろ発見され論議を呼んでいる。歴史的真相の追求はさておき、ドラマとしては主人公が女性でなければ格段に面白味のないものになってしまうだろう。

では、女性であることを偽って即位し出産までした女性教皇がいたとしたらどうであろうか。こちらは直虎と違って実在さえ疑われるのだが、「女教皇ヨハンナ」にまつわる数多の伝説は、たしかに現代にいたるまで人々によって語り継がれ、フェミニズム的受容を含めさまざまな意味付与がなされてきた。もしヨハンナが実在する人物であると証明されるならば、今日のカトリックにおける女性の聖職叙階問題などは、即解決できそうなものである。

近年の「ヨハンナ」ブームの火付け役となったのは、アメリカ人作家ドナ・W・クロスの小説『女教皇ヨハンナ』(1996年)とその映画化(ゼンケ・ヴォルトマン監督、独英伊西合作、2009年)である。クロスの歴史フィクションは読者にとって「手に汗握る」魅力的なものであるが、あらすじを紹介してみよう。

ドイツに生まれたヨハンナは、イングランド出身の権威主義的な聖堂参事会員である父の下に育ち、男兄弟とは違って勉学が許されない中、ピザンツの放浪学者との出会いを通して、次第にラテン語のみならずギリシア語をも習得していく。やがて司教座聖堂附属学校に通うが、そこでも女性ゆえのハラスメントが待ち受ける。ついにヨハンナは男装してフルダの修道院に逃げ込み、治療師としての才能と司祭としての資質を開花させるが、ここでも身元がばれそうになる。このような青春期の後に、ヨハンナの「フェミニズム的歴史ユートピア」が続く。彼女はヨハンネス・アングリクスと名乗り、ローマで教皇セルギウス2世の侍医として活躍していく。小説と映画では、司祭枢機卿アナスタシウス・ピブリオテカリウスをめぐる陰謀やヨハンナとザクセンの伯ゲロルトとの恋愛が描かれる。さらにヨハンナは皇帝ロタール1世と出会い、教皇文書局の役人として出世し、ついには教皇にまで昇りつめる、という具合に話は展開していく。物語の最終局面は、ローマにおける祭礼行列の最中にゲロルトが暗殺され、ヨハンナが出産の後に亡くなる壮絶な場面となる。

このようにして、クロスの「女性活躍」小説は、ヨハンナを「あまり注目されない中世の女性から女性運動の救世主へと変貌させることにより、読者の心をつかんだ」。「著者あとがき一教皇ヨハンナは実在したか」に窺えるように、クロス自身はヨハンナを実在の人物とみなし、次のように語る。「こうした女性たちによってともされた希望の光は、暗闇のなかで細々ながら燃えつづけ、決して消えることはなかった。強い意志をもって夢を追いかける女性には必ず道が開けた。本書はそうしたある女性の物語である。」

クロスは、女教皇ヨハンナに関して「17世紀までその歴史の実在性が受け入れられていたが、その後宗派間論争の時代に

プロテスタントからの攻撃を受け、ヨハンナの歴史的事実性がヴァティカンにより揉み消され、その際、何百ともいわれる書籍や写本が処分された」という陰謀説を唱える。カトリック側の非実在説の論拠についてクロスは反論を試みているが、フェミニスト神学者エリーザベト・ゲスマン(ゴスマン)でさえ「最大限の温情」をもって見ても、クロスの説明には歴史的説得力が欠けていると述べている。

### 伝説の伝記(バイオグラフィー)

ヨハンナが実在したかどうかについては、すでに19世紀の教会史家イグナツ・フォン・デリンガーの女教皇ヨハンナ伝説の成立史研究によって(非実在の)決着がついていると、マックス・ケルナーらは指摘する。デリンガーはむしろ伝説を「文化史的自律性」を持つものと捉え、それを捨て去るのではなく歴史学の対象として、「現象」として扱うことによって、いわば心性史を手掛けたとされる。「適切に分析される限りにおいて伝説は一つの重要な史料たりうる」からである。ケルナーらの狙いもまた、「伝説の伝記」という副題が示すごとく、ヨハンナの「非神話化」ではなく、一連の史料群を伝記という形式で叙述し、受容史(Rezeptionsgeschichte)を通して、もう一つの現実(Wirklichkeit)を描き出すことにある。「現実は社会的に構成される」というわけである。

ヨハンナの物語が成立し、やがて舞台が9世紀に設定された後、種々の集団がさまざまな形式や目的の下に伝説を利用していく。13世紀末の教皇職の正しい道をめぐる議論、1378年以降の大シスマ(大分裂)における二人の教皇の正当性をめぐる議論、宗教改革以降の宗派間論争など、特に時代の転換期にヨハンナは利用され続けてきたという。宗派間論争以降、女教皇ヨハンナは「嘘か本当か」という硬直した議論に陥ってしまうが(プロテスタントにとってヨハンナが実在してくれる方が都合がよく、カトリックにとってはその逆)、中世末期に展開された議論は多様で柔軟であることが、ケルナーらによって明らかにされている。ケルナーらも言うように、クロスによるフェミニズム的受容において、実はことさらヨハンナの実在を立証する必要はないのかもしれない。ヨハンナ伝説は、「既存の体制に対する代案」として昔も今もたしかに機能してきた。時にそれは教皇庁に限らず、男性優位社会一般に対する批判ともなり得た。ヨハンナ伝説の受容から分かることは、もはや歴史と神話(伝説)との境界線は曖昧となり、神話は「ただ一つの神話」ではなく歴史性を持つということだろう。実在する人物か否かにかかわらず、その物語が常にわれわれに「開かれて」いる限り、フェミニズム的受容は特殊なものではないのである。

### [参考文献]

M・ケルナー、K・ヘルバース『女教皇ヨハンナ―伝説の伝記』三元社、2015年。

ドナ・W・クロス『女教皇ヨハンナ』阪田由美子訳、草思社、2005年。

Elisabeth Gössmann, "Die Päpstin Johanna". *Der Skandal eines weiblichen Papstes. Eine Rezeptionsgeschichte*, Berlin 1998.